山ぼうし

第３７号　平成２０年　４月３０日

宮古工業高等学校　校報

山ぼうしは「立志の樹」といわれ、本校正門脇に植樹されており、

花も実も　蒼天に立つ　山ぼうし

の碑（初代 PTA 会長盛合聡の揮毫）がある。

人　生　三　万　日

校長　兼　平　栄　補

いよいよ新年度が始まった。また新しい日々の繰り返しになるが、決して同じ日々はない。一日一日を大事に少しずつでもいいから向上できるよう意識しながら生活して欲しい。

曹洞宗のある高僧によると、人生はおよそ三万日だという。

生まれてから一万日、年齢で言えば２７歳頃までは、両親から受けた身体の鍛錬を怠らず、先人先輩から学び、書物から知恵を得て、それによって物事の是非の判断力や道徳心を身につけて、ひたすら自己の確立に努め、将来に備えるべき時期だということである。

そして、一万日から二万日、５４歳頃になるまでが、まさに働き盛り、青壮年期で、人生において最も盛んな年代である。一万日までの、両親、先輩たちから学び、身につけたものを、人生の後輩たちに引き継ぐ時期と言える。言うならば、恩返しの年代なのである。　この世代の活躍ぶり如何が、社会の進む道を決定づけることになる。もとを辿れば、この時期の働き盛りの人々が、一万日までの若い頃にどの程度学び、どのように自己を確立したかによって、社会の有り様や進む方向が、期待できるものか悲劇的かのいずれかになるのである。

事ある毎に言っているが、本校は、地元就職者数が他校に抜きん出て多い。諸君は、将来の宮古市の繁栄を双肩に担っている。

宮古市のまちづくりの中心は、他校の卒業生ではない。宮古工業高等学校の卒業生が、宮古市の将来像を実現していくのである。その意味で、宮古市の本校に対する期待は大きく、産業支援センターの手厚い支援を受けている。諸君はその期待に応えなければならない。

諸君は、現在六千日程を生きてきたわけで、修養の期間の折り返し点を過ぎていることになる。一万日の残る四千日前後をどのように生きるかによって、自分ひいては家族、社会の未来、宮古市の将来がよくも悪くも決定するわけである。

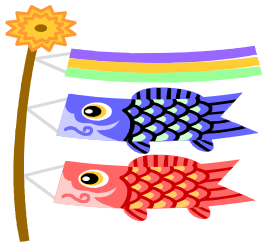
新年度の日々を、知育、徳育、体育の三つの面で、少しずつでもよいから、昨日よりは向上した今日、今日より向上する明日というように心がけて生活し、自己を確立する一万日目に向けて有意義に過ごして欲しいものである。

因みに、二万日以降は、言い換えれば老年期は思い通り生きてよいのだそうである。

なお、自分が誕生後何日目か（日齢）は、誕生日を入力すると計算してくれるサイトがあるので算出してみては如何だろうか。

5月行事予定

5月　１日（木）　交通安全講話
5月　７日（水）　結核検診（１年）
5月　８日（木）　頭髪服装検査
5月１０日（土）　ＰＴＡ総会
5月１０日（土）～１６日
学校へいこう週間
5月１４日（水）　津軽石川原清掃
5月２２日（木）　生徒総会
5月２３日（金）　開校記念日
5月２９日（木）　高総体開会式



入学式挙行！

「平成２０年度入学式」が４月８日（火）に挙行されました。式では来賓、保護者、教職員が見守る中、新しい制服に身を包んだ新入生が一人ずつ名前を呼ばれ、機械科３２名、電気電子科４０名、建築設備科３０名、計１０２名の入学が許可されました。

兼平校長は「工業高校と産業界の連携のもと、ものづくり人材の育成に本腰を入れようと様々が施策が講じられようとしている。諸君には、こうした産業界の期待に応えるべく、将来を見据えた意欲的な取り組みが求められている。三年後に向け、自分をより高める努力を続けてほしい」と式辞を述べました。

新入生を代表して、建築設備科の阿部大地君が「私たちは常に目的意識を持ち、工業高校でなすべきことに精一杯努力してそれぞれ個々の持っている得意なものを三年間のうちで十分に発揮して本校の更なる発展に努めたい」と決意をを述べました。　学科改編により３学科体制の完成年度となります。新入生には来年の完成年度に向けて新しい歴史を築いていってほしいと願っています。

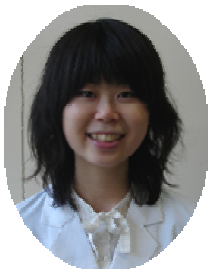
＜新任の先生方＞　①　氏　名　②前任校　③担当教科　④本校の印象

①赤沼　正博
②久慈工業高校
③工業（電気）
④挨拶が立派

①佐々木　大祐
②盛岡工業高校
③工業（機械）
④校舎がきれい

①澤田　幸英
②軽米高校
③地歴・公民
④広くてきれいな校舎

①菊池　崇
②不来方高校
③数学
④自然に囲まれている



①村上　志穂
②竜森小学校（秋田県）
③保健室
④広い,大きい,きれい

①吉田　茂樹
②沼宮内高校
③事務室
④前向きな生徒が多い

応援歌練習終わる

応援歌練習は４月１１日（金）から１８日（金）までの間に中日を１日設けた５日間の日程で行われました。応援歌練習本番まで応援団自作の CD と、生徒手帳に記載してある歌詞を見ながら予習に取り組んだ１年生ではありましたが、緊張と不安からか応援団が思い描いたような円滑な練習とはいかず、お互い苦難の道でした。

宮古工業高校に入学したからには、応援歌や校歌を覚えずして宮工生の一員として認められないんだ、と１年生は焦り必死でした。応援団員もまた後輩に対してどう指導したらいいか工夫したり、応援団としての誇りや伝統を胸に、日毎に堂々と指導していく姿に感動を覚えました。応援歌練習残り２日は全校生徒での応援歌練習でした。２・３年生は先輩として立派に見本を見せました。特にも３年生の声量には「さすが３年生だ」と驚嘆させられました。

応援歌練習を終えて、新入生も晴れて宮工生の一員として先輩たちも認めたはずです。また、この応援活動の機会が多く宮古工業に訪れるよう期待が膨らみます。みなさんご苦労様でした。